

# 柳生宗矩の兵法伝書についての一考察

## ——毛利博物館所蔵資料を中心として——

本林 義範

### はじめに

先に、筆者は本誌第5号において柳生宗厳の伝書を採り上げたが、今回はその宗厳の五男・宗矩の伝書について述べてみようと思う。柳生宗矩は言うまでもなく近世武術伝書を代表する『兵法家伝書』（以下『家伝書』）の著者である。ただ『家伝書』は寛永九年（一六三二）に書き上げられており、宗矩は、この時既に齡六〇を越えていた。『家伝書』の末尾に、「漸く知命の年を過ぎ、此の道の滋味を得たり。一件の理を得る毎に之を記す。積んで多端に涉り、窮むる所一心に帰し、一心多事に涉り、多事一心に収まる。」<sup>1</sup>と記されているように、その内容は多年の修練を経てまとめあげられた、総合的なものと考えられる。筆者としても、この『家伝書』の内容を思想的に解釈することに関心をもっているが、そのためには『家伝書』以前の伝書の考察が不可欠であろう。そこで、本論文では、柳生宗矩

の『家伝書』に至るまでの、修行過程に焦点を当てて考察していきたい。

## 一 柳生宗矩の伝書の現状と問題点

柳生宗矩（一五七一～一六四六）の伝書類に関して現在判明しているものは、慶長九年（一六〇四）に徳川秀忠より出された起請文が最も早く、最後のものは死去する前年の正保二年（一六四五）に記された「玉成集」である。まず、ここでは後述する毛利博物館所蔵の伝書も含めて宗矩の伝書を年代順にわかる限りであげてみる。<sup>2)</sup>

日付	宛て名	種別等
① 慶長九年（一六〇四）九月十一日	柳生宗矩	徳川秀忠よりの起請文
② 慶長十六年（一六一二）八月	毛利秀就	「新陰流截合口傳書事」
③ 慶長十六年八月	毛利秀就	印可状
④ 「慶長十六年」十二月十一日	毛利秀就	印可状
⑤ 元和四年（一六一八）十一月	鍋島三平	「見之卷」「観之卷」 「切合極意之卷」
⑥ 元和九年（一六二三）二月二日		「兵法截合心持の事」

⑦元和九年二月九日

兵法答書

⑧寛永三年（一六二六）三月吉日

酒井讚岐守

「新陰流兵法心持」

⑨寛永三年三月

酒井讚岐守

「外の物の事」

⑩寛永九年（一六三二）九月

『兵法家伝書』

⑪寛永十年二月

「新陰流兵書」

⑫寛永十四年仲秋吉日

茨木又左衛門尉

「新陰流兵法習目録」

⑬寛永二十一年（一六四四）五月二十一日

「玉成集五ヶの身位の事」

⑭正保二年（一六四五）五月十二日

鍋島飛騨守

「玉成集」

以上が現在判明している宗矩伝書の残存状況である。そしてこの中の②③④の伝書が毛利博物館所蔵の宗矩の伝書である。

では、問題点としてあげられることは何であろうか。まず、宗矩が、父であり師でもあった宗厳から新陰流においてどのような内容の伝授を受けたのが問題となろう。現在、宗厳の伝書の中で、宗矩宛の伝書は筆者の管見の限りでは見当たらない。宗厳が身内で伝書を与えた人物は今のところ長男・厳勝の嫡男で尾張柳生家の祖となった柳生利厳のみと考えられる。そして、その利厳に与えた伝書は、宗厳最晩年のもので、特に、死去する直前の「没滋味手段口傳書」には、

如此儀誰ニモ雖無之其方名字成者ニ少モ不残ト相傳申候也  
今日迄ハ子供一類ニ一人も相傳無之也。貴所ニ可相傳者也。

と記されており、宗敵一代の工夫の総決算と考えられる。この記述から推測すると、宗敵は自らの工夫の全てを嫡孫の利敵に伝えたと考えられるが、では、宗敵に対して宗敵から伝授があつたとすると、それはどのような内容であつたのが、まず一つ目の問題としてあげられる。その解明のために宗矩と利敵宛ての宗敵伝書の内容を比較検討してみたい。

次には、宗矩が『家伝書』を完成させるまでの過程で、どのような考え方、工夫をしたのかという問題があげられる。『家伝書』は「進履橋」「殺人刀」「活人劍（無刀之巻を含む）」の三巻から構成されているが、「進履橋」は「大凡の目録」で新陰流流祖の上泉武藏守秀綱と柳生宗敵から「直伝」してきたもので内容に変化はない。一方「殺人刀」「活人劍」の内容については、宗矩の長男・十兵衛三敵が自著のなかで次のように述べている。

我祖父古但馬守宗敵従上泉武藏守秀綱此道を相伝してより、其身一代深く修行して、心に得て是を手にすること、おそらくは、氷は水より成て、水よりもすさまじき物か。老父其伝を継て、若年より此道に心をつくし、太刀のみならず鑓長刀の類にいたるまで、兵道とさへいへは不聞といふ事なし。一代其身に得てつかふまつる事、又おそらくは藍より出て藍よりも青き物か。しかも善知識にまみへ、数々の古則話頭を参し、一々皆その旨を得ては、是をわか兵法の機前にあて、心の転所とす。故禅話とも数句を注し、是を兵法の道に引きなそらへたる事多。一

家の書を作りて子孫に伝へむとてあつめ、上巻を殺人刀と名付、下巻をは活人劍と名付。此上下は唯授一子の書也とて秘之。

これからもわかるように、「殺人刀」「活人劍」は宗徹・宗矩父子の工夫したところを述べたものであり、「習の外  
の別伝」である。そして、宗矩は、太刀の外に鑓長刀についての研究も重ね、さらに善知識すなわち沢庵禪師との交  
流を通じて『家伝書』を形成していったことがわかる。そこで、宗矩が宗徹から伝授を受けたあと、その内容をどの  
ように捉え直していったのが二つ目の問題点となる。ただ、本稿では禅との問題は取り上げずに、「劍術」の面か  
らのみ見ていきたい。

## 二 毛利博物館所蔵伝書について

上記の問題点について、これを考察する上で重要な資料として筆者が注目するのが、山口県防府市の毛利博物館に  
所蔵されている柳生宗矩の伝書である。(一の表—②③④)そこで、まずこれらの伝書の全文を掲載し、その後で問  
題点について考察を進めてゆきたい。<sup>5)</sup>

② 「新陰流截合口傳書事」

身懸五箇之大事

第一 身を一重になすへき事

第二 敵のこふし我肩にくらふへき事

第三 身を沈にして我が拳を楯にしてさけさる事

第四 身をかかりさきの膝に身もたせ跡のえひらをひらく事

第五 左のひちをかかめさる事

条々口傳有之

三箇大事

一 拍子あるかまへの事

一 拍子なきかまへの事

一 身離かまへの事

三拍子之事

一 越拍子之事

一 付拍子之事

一 当拍子之事

三見大事

- 一 太刀さきの事
- 一 敵の拳之事
- 一 敵の顔之事
- 右条々口傳有之
- 目付三ツ之事
- 一 二星之事
- 一 嶺谷之事
- 一 遠山之事
- 截合之心持之事
- 一 太刀間三尺之事
- 一 色付色随事
- 一 待曲之事
- 一 高曲之事
- 一 敵三寸味方三寸之事
- 一 二目遣之事
- 一 遠近之事
- 一 大調子小調子小調子大調子之事

一 しやうか之事

一 小太刀一尺五寸迹の事

一 太刀つれの事

一 風水音を知事

一 打三ツ之事

𠄎字手裏見

心随萬境轉

轉處實能幽

随流認得性

無喜又無憂

一 有無調子之事

一 打而被打被打而勝事

一 懸待有之事

一 身離目付分目搦之事

一 小太刀二寸五分迹之事

一 氣ハ肩先見分目付之事

一 敵味方二心不持条々口傳之事

一 間拍子步之事

一 連拍子之事

一 水月之事

一 神妙劍 付兩一尺位分待曲之事

心地含諸種

普兩悉皆萌

頓悟華性者

菩提菓自成

一 身位三重付殘心之事

一 心下作之事

一 兵法病氣去事

一 老理位大事口傳事

一 勤英雄知心是極一刀習事

右条々口傳有之

上泉武藏守

藤原秀綱

柳生但馬守

平宗敵

柳生又右衛門尉

平宗矩（花押）

進上

秀就様

参

観念心持

一 残心之事

一 心之きやうの事

一 無も有も無有之事

一 敵にしゆりしゆけんつかはしてかつ心持

一 ひとつにさる事

一 一理のならひの事 付向のかまへに吉

一 水月ぬすむ心持之事

- 其かげの事
- 足そのの身にて取事
- 其道をふさくふうたひの事
- 敵味方両一尺之事
- 座を見にて取心持
- 足のはこひやうの事
- 懸のかけ取之事
- 懸之持取之事
- 三重五重之事
- もつしみの事
- 心の下作之事
- 茂拍子之事
- 敵二二心をもたせざる事
- 同二心もたざる事
- あまるをかふる事
- 棒心之事
- むかひの事

一 西江水之事

一 □のならひの事

一 こくうのかげの事

一 水入之事

観受除無明

慶長十六年 柳生又右衛門尉

八月日

(花押)

進上

秀就様

参

□□□八ツ

③印可状

一 手字手裏見

一 水月

一 神妙劍

一 一去 一理之事

一 空之習之事

一 棒心之事

付心持気はかたさき心下作肝要也

右一書之通習数多雖有之此こつにて御座候右之習之外ハ不可有候追而習之儀連々可申上候恐惶謹言

慶長十六年 柳生又右衛門尉

八月 日 宗矩 (花押)

進上

秀就様

参人々御中

④印可状

以上

新陰流兵法依御執心目録ニ而拙子存之通不残置申上候親二者申聞一書多雖有言手字手裏劍水月神妙劍病氣之習

空之習棒心之心持□又觀見心持之外一圓二□意二用不申候残之儀連々可申上候若於偽

忝

魔利支尊天日本国中大小神儀八幡大菩薩御討可蒙罷者也此上者失念有之追而可申上候

將軍様御詮二候間未指上得共久々御懇意之条乍惶以自筆如此致進上仕候他見他言被成て被下候間數自然何へ御指南有度儀も於有之者堅く懷紙被仰付候て御指南可被成候委細以面上候可得尊意候恐惶謹言

柳生又右衛門尉

十二月十一日 宗矩（花押）

進上

秀就様

参人々御中

### 三 宗矩伝書の形成上における「毛利博物館所蔵伝書」の意義

以上が毛利博物館所蔵の宗矩伝書である。ではまず、最初の問題点について考えてみたい。すなわち宗矩は宗厳からいかなる伝授をうけたのかということである。これについては②の「新陰流截合口傳書事」と宗厳が嫡孫の利厳に宛てた伝書とを比較検討してみたい。

利敵に宛てた伝書には次の三種類がある。<sup>6)</sup>

(A) 「新陰流兵法目録事」〔慶長八年三月〕

(B) 「新陰流截合口伝書事」〔慶長八年三月〕

(C) 「没滋味手段口伝書」〔慶長九年八月、慶長十年六月に追記〕

それぞれの内容については、本誌第5号の中で既に翻刻、紹介しているが、まず宗敵伝書(A)は若干語句の相違があるものの『家伝書』の「進履橋」に相当している。伝書としてこの内容で宗敵から宗矩へ宛てたものは見当たらないが、両者の類似性から宗矩も同様の伝書を受けている可能性はある。そして宗敵伝書(B)と宗矩伝書②は題名が同じであるが、内容について見てみると、両伝書はそれぞれ内容に小見出しをつけていくつかにまとめている。宗敵伝書(B)では、

△身懸五箇之大事

△三箇大事

△三拍子之事

△三見大事

△字手裏見

の五つにまとめられている。一方宗矩伝書②の内容は、

身懸五箇之大事

三箇大事

三拍子之事

三見大事

目付三ツ之事（\*）

截合之心持之事（\*）

字手裏見

観念心持（☆）

と八つにまとめられており（\*）と（☆）の三つの小見出しが新たに追加されている。その内容は、（\*）の二つを含む「三見大事」から「字手裏見」までは、项目的には宗厳伝書（B）とほぼ同じであり、二つの小見出しは宗矩の工夫でわかりやすくするために付けられたことが推測される。つまり、宗矩伝書②は「観念心持」を除くと、宗厳伝書（B）と極めてよく似ており、このことから、宗矩も（B）と同様のものを伝授されている可能性が考えられる。

では、残りの「観念心持」は宗厳伝書（C）と何か関係が認められるのか見てみる。まず「観念心持」の内容を見ると、全部で二十八項目が無造作に並んでいるだけである。一方宗厳伝書（C）は「△五合剣」「△五観之大事」「△一見之大事」の三つに大別されており、二十二の項目がある。そしてこのあと追記がある内容となっている。両者の

項目を比較してみると、「観念心持」は、二十八項目の内八項目が宗徹伝書（C）の項目と重なっているに過ぎず、むしろ、後に書かれた元和四年の鍋島三平宛の宗矩伝書⑤の項目と重なる部分の方が多く、十五項目が上げられる。これらの事から、「観念心持」は宗徹伝書（C）の内容を全面的に受け継いでいるのではないことがわかる。つまり、宗徹伝書（C）の項目を引用しながらも、その後の伝書に見られる項目が同時に並んでいることから、宗矩が独自に構成したものと考えられる。この内容については、第二の問題点に關係するのでそこでもう一度言及するが、結局、宗矩が宗徹伝書（C）の内容をすべて伝授されたかどうかは、「観念心持」を見る限り現段階では不明である。

次にその二つ目の問題点である宗矩の工夫について、宗矩伝書③④と宗矩伝書②に見える「観念心持」を参考に考えてゆきたい。

まず宗矩伝書③を見ると、「手字手裏見」「水月」「神妙劍」「一去 一理之事」「空之習之事」「棒心之事」の六項目が上げられているが、宗矩によると「習」は多くあるが、この六つが「こつ」だという。「こつ」という言い方から、この六項目を宗矩が重視していることがわかる。そして、この六項目を『家伝書』で探して見ると、確かに下巻の「活人劍」に六つとも見出すことができるが、ただ、この六項目の関連性を明確にする記述は見当たらない。そこで、他の伝書を調べて見ると、宗矩伝書⑥の中に次のように記されている箇所がある。

一 ならいの心もちいろいろこれありといへとも、三ツをわすれましく候。

一 目付にハ 種字種利劍

一 太刀あひにハ 水月

一 太刀のおさまりにハ神妙劍

此三ツをわすれましき事第一の儀なり。此ならい右のもくろくにあり。

一 病氣をさる事、一ツにさる事、空の調子、捧心、これしゅちしゅりけんの、しんのくらいなり。

これを見ると六項目のうち「手字手裏見」「水月」「神妙劍」が「第一の儀」で最も重要であり、残り三つの「一理之事」「空之習之事」「捧心之事」はそれぞれ「手字手裏見」の「真の位」という関係にあることがわかる。<sup>8)</sup>つまり、この宗矩伝書⑥によつてそれぞれの意味合いがはっきりとする。そして宗矩伝書③から宗矩がこの重要性を慶長十六年の段階から意識していたことがわかる。また、宗矩伝書④（毛利博物館は慶長十六年（一六一一）とするが、明確な年代は不明）においても「手字手裏劍 水月 神妙劍 病氣之習 空之習 捧心之心持」を特に取り上げ、その重要性を強調している。

さらに、先に宗矩伝書②の「観念心持」についてみた時、「観念心持」は宗矩伝書（C）の内容を全面的に受け継いでいるのではないことがわかる。むしろ、宗矩伝書（C）の項目を引用しながらも、その後の伝書に見られる項目が同時に並んでいることから、宗矩が独自に構成したものと考えられる、と述べたが、この「観念心持」は、その宗矩伝書（C）と宗矩伝書⑤の両者の項目を併せ持つという点で、宗矩独自の工夫の一断面を示すものと考えられる。

そして、宗矩伝書⑤も、その構成が他と異なる点で独創的であり、宗矩の工夫の跡が見られる。宗矩伝書⑤は、表にあるように「見之巻」「観之巻」「切合極意之巻」の三巻に分けられているが、この内、「観之巻」の内容は「切合観之習極意之心持之事」と「神妙劍」の二つに分類され、「切合極意之巻」では全内容に対して「切合極意見之心持

之事」という表題がつけられている。三巻の内容を検討すると、「見之巻」は、その前半に上泉伊勢守以来直伝の「進履橋」に相当する部分そのまま使われている以外は、宗厳伝書(B)(C)と宗矩伝書②の「観念心持」の内容がそれぞれ混ぜて使われ、構成し直されている。この構成の仕方からわかることは、特に「見」と「観」という考え方を意識しているということである。宗矩によれば、「見」とは「目をあき、現在にみる事」で、「観」とは「目をふさぎ、工夫思案の所」だとい<sup>9</sup>う。

宗矩伝書④には重要事項として先の六項目の他に「観見心持」という言葉が上げられているが、宗矩伝書⑬の「玉成集」にも、

観見乃心持有。観は目をふさき心にみる心持也。至りてハ心計におもひ候へは成物也。惣別当流にハ観の心持を第一とす。観に至れば何事もよく成物也。<sup>10</sup>

と述べられ、「観」の重要さが説かれている。また、最重要項目にあげられた「手字手裏見」「水月」「神妙劍」の三つは『家伝書』の「五観一見」に含まれる項目だが、「一見」は次に見られるように、むしろ「観」よりもさらに重要視されている。『月之抄』

五観一見と云心持ハ、習所作、身ニウクル所之惣太体は五ツニシテ、五ツの内ヨリ見る心一つヲ専トシテ一見ト云心持也。四つハ観ニ用ル也。此一見ト見る心ヲサシテ是極一刀真実之無刀ト云。<sup>11</sup>

これらのことから、宗矩が「見」「観」という意識を強く持ち、この観点から兵法の内容をとらえ直すそうとしていたことが伺われるのである。

以上の考察から二つの問題点に対して次のことが判明する。

一つ目の問題点については、宗矩の伝書を三つの利敵宛の宗敵伝書（A）（B）（C）と比較検討した結果、（A）（B）との類似点は認められたが、（C）に関しては類似点は一部だけに過ぎなかった。つまり、宗矩は、宗敵から利敵宛の伝書のうち（A）（B）の二つは伝授されている可能性があるが、三つ目の（C）「没滋味手段口伝書」については、今の段階では同様の伝授を受けたとは考えにくい。

そして、二つ目の問題点である、宗矩独自の工夫はどのようなものかということについては、まず慶長十六年に、数ある習いの項目の中で、宗矩は「手字手裏見」「水月」「神妙劍」「一去 一理之事」「空之習之事」「棒心之事」の六項目を重要とし、これらを「二つ」として考えていたことがわかった。また、六つの中では、「手字手裏見」「水月」「神妙劍」こそが「第一の儀」であり、最重要項目だとする。そして、伝書を構成する上において、宗矩はこの六項目を中心にさらに「見」「観」という概念を用いてその内容を整理・構成しようと試みていたことがわかるのである。

## おわりに

『家伝書』形成までの柳生宗矩の伝書を見ると、將軍に献上したものが大半を占めており（表の⑥⑦⑧⑨）、<sup>12</sup>さらに、その内容が、文書形式のため全体像がつかみにくいという事が難点としてあげられる。しかも、毛利秀就宛の伝書に「將軍様御錠二候間未指上得」とあるように、通常は將軍の命令で伝書は出せないという状況が宗矩にはあったことも推測できる。従って、宗矩が出した伝書が全体でどのくらいあるのかは不明であるが、そう多い数になるとも考えにくい。今後もできるだけ宗厳・宗矩父子の伝書を見出し、考察を進めていきたい。また、宗矩は政治的な立場に非常に深く関わっていたという面もあるので、この方面からも考察を加えてみたいと思っている。

### 〔注〕

- (1) 『兵法家伝書』（柳生宗矩著 渡辺一郎校注 岩波文庫 一九八五年）一一七〜一一八頁  
(2) 表を作成するにあたって参考にした資料は次の通り。

改訂『史料柳生新陰流』上・下 今村嘉雄編 新人物往来社 一九九五年

『新陰流傳書集』上巻 筑波大学武道文化研究会編 筑波書林 一九九一年

『柳生新陰流兵法覚書』 東海寺住職・大嶽泰敏編 マイライフ社 一九七九年

(3) 『柳生新陰流道眼』(柳生延春著 島津書房 一九九六年)の巻頭六〜七頁

(4) 前掲 改訂『史料柳生新陰流』下巻 一〇〇頁

(5) ②「新陰流截合口傳書事」の巻頭・巻末の部分と、③印可状、④印可状の全文は、『特別展 大名の遊戯と嗜み』(毛利博物館編集・発行 一九九三年)に翻刻・掲載されているので、これを参考にした。なお、若干の語句の訂正を行った。

(6) 本誌第5号所収拙著「柳生宗厳兵法伝書考——毛利博物館所蔵資料を中心として——」に全文翻刻。原典は前掲『柳生新陰流道眼』、『正伝新陰流』(柳生厳長著 島津書房 一九八九年)に掲載されている。

(7) 前掲 改訂『史料柳生新陰流』上巻 二五八頁

(8) 「病気をさる事」「一去(一ツにさる事)」「二理」の三つは、「勝とう、打とう、待とう」という余計な気持ち心が心の中に起こり、それによって心の働きが不自由になることを防ぐという点で共通点を持つ。以下、それぞれの内容を示す原文をあげておく。

#### 一 病気の事

かたんと一筋におもふも病也。兵法つかはむと一筋におもふも病也。習のたけを出さんと一筋におもふも病、かゝらんと一筋におもふも病也。またんとばかりおもふも病也。病をさらんと一筋におもひかたまりたるも病也。何事も心の一すぢにとどまりたるを病とする也。此様々の病、皆心にあるなれば、此等の病をさつて心を調ふる事也。

〔兵法家伝書〕 殺人刀上)

病氣ヲ去事、付り去ル所三ツ

(前略) 立相テ敵ノかお、敵の太刀ヲミタク、ヲクスル心出ルモノ也。是ヲ病氣ト云、此三ツヲ去テ、シユリケンバカリニ心ヲ付ル事專也。(後略)

(柳生十兵衛三厳著『月之抄』)

一二去ル事

父（宗矩―筆者注）云、病氣ノ内ヲ、動キ一つニサレト云事也。三つノ病ヲ去テ、手利劍一つニセヨト云コト也。（中略）  
習之數々ヲ思ふモ病なれハ、いつれも皆去テ一心ひとつに至ル心持、一去真之位ナリ。  
〔月之抄〕

一 一理の事 向構の時の心懸、鐘の時の心持也。無刀の用心。

（前略）さしつめたるきびしき事、一大事也。そこをよく心につまかに目を付けて、ほかとしたる事にはぬする所を、一理と云ふ也。（中略）わがうしろに、かべ・ついぢなどありて、ひかれぬ時、むかふよりさしあつる時などの用心也。（中略）目を一所にすへ、心を一所にとどめ、油断しては中々成らざる事也。  
〔兵法家伝書〕 活人劍下

一理之事

（前略）向構ハツク事、切ルよりも早く、ミヘニクモノ也。然ル故ニ、ツク一つヲ心に思ひ入ハ、切事ハミへよき心也。

〔月之抄〕

（9）前掲 改訂『史料柳生新陰流』上卷 二八九頁

（10）前掲 改訂『史料柳生新陰流』上卷 三四八頁

（11）前掲 改訂『史料柳生新陰流』下卷 四三頁

（12）伝書⑥は「兵法截相心持乃事」として仙台藩師範・狭川新之進に与えられているが、その奥書には「寛永十一甲戌年二月吉日、上様江朽木民部太輔殿、御披露」とあるという。（前掲 改訂『史料柳生新陰流』上卷 二六五頁）

伝書⑦には、その末尾に「右は公方様江但馬守様献上之書也」とある。（『新陰流傳書集』上卷「筑波大学武道文化研究会編 筑

波書林 平成三年〕 九六頁)

伝書⑧⑨はいづれも末文に「御披露」を願う旨が記されており、酒井讃岐守を通じて上様へ献上されたと考えられる。(『定本大和柳生一族 新陰流の系譜』〔今村嘉雄著 新人物往来社 一九九四年〕一八四～一八七頁)